

月報

岡崎の教育



5月号

「せんせい」
顔いっぱいの笑顔が駆けてくる。
みんなの声が重なり合う。
「おはよう」「おはよう」

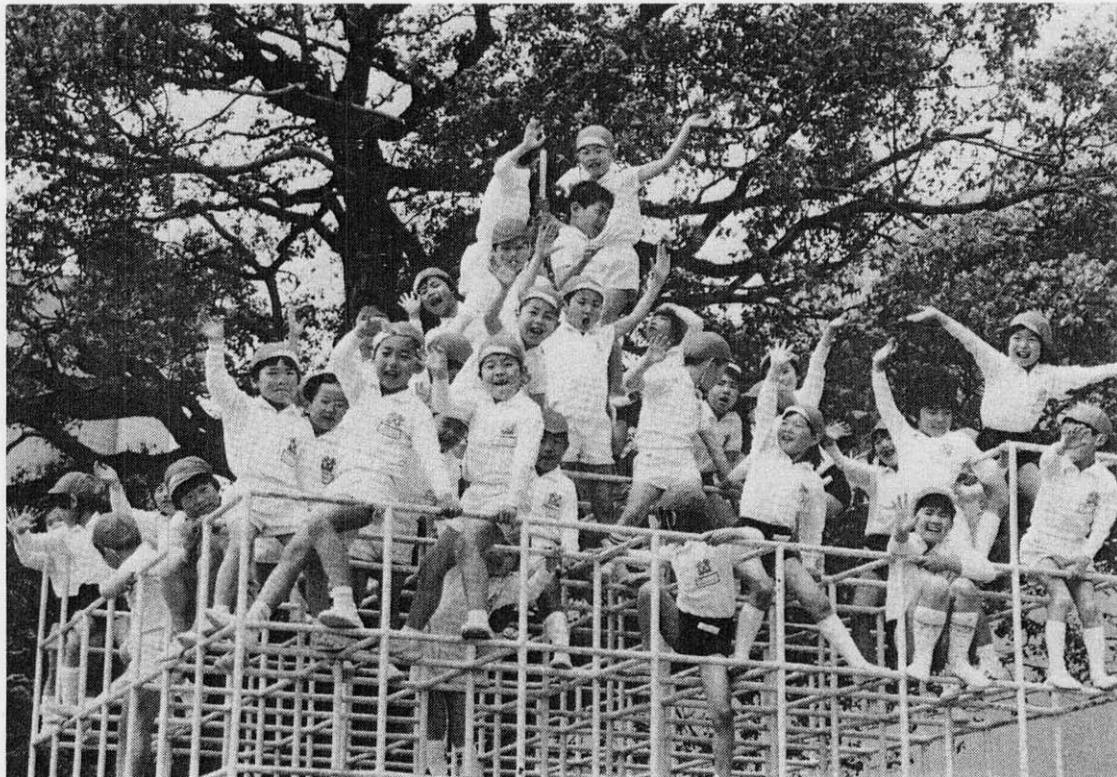
「いくぞう」の声で始まる
ドッジボール。
光る汗をぬぐいもせず、
目がボールを追い続ける。

この子たちこそ、
わたしの子ども。

昭和61年5月1日

編集 / 発行

岡崎市教育委員会

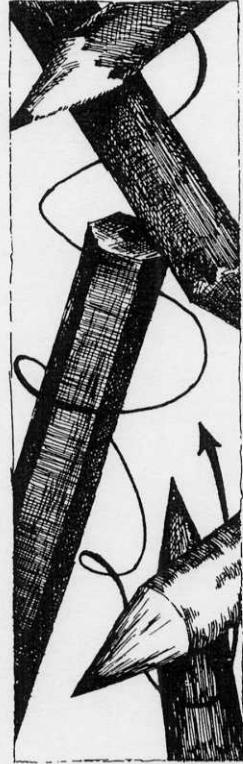


(大樹のようにー矢作北小)

一 教育隨想

ヨーロッパのバカンス

大川博美



私は仕事の関係でよく外国へまいります。初めは、世界のあちこちを良い家具を求めて回りました。そこでわかつたことは、歴史の深いヨーロッパの中でも、イタリアの家具はデザイン的にも技術的にもすばらしいものがあるということです。イタリアの北部にあるミラノの展示会で、それに出逢った時の感動は今もつて忘れることができません。特にデザインの美しさ、伝統的な重みのある椅子の一つ一つに見惚れ、時のたつのも忘れるほどでした。まさに「ローマは一日にして成らず」でありました。日本人は、かたくなに日本のものを守り通すことより、異文化をうまく取り入れ、自國の文化と混ぜ合わせアレンジする能力を持っています。イタリアの家具を見る限り、自國のデザインを世界最高のものと誇り、アンティークなものを

そのまま受け継ぐ強さを持つています。どのようにして、この技術を継がせるのか、私は興味を持つようになりました。昨年の八月、フランスのパリは、ども日本人がいっぱいでしたが、当のフランス人は、店のウインドをビックシリ閉めて、一ヶ月から二ヶ月のバカンスを楽しみに出かけ、空っぽという感じでした。日本人から見ると、実に優雅に自分たちの生活を楽しんでいるが、それだけが古いものを大切に守り伝えいく機会がこういうところにあるのでしょうか。

親と子の話し合う時間が、バカンスの中にあるとは思つてもいませんでしたので、素材本身にも親を尊敬する態度が青年の動きに見られ、親と子のつながりの原点を見る思いがしました。

日本へ帰り、名古屋から岡崎へと電車の窓から見れば、ほとんどの家には電気ケーブルを楽しんでいます。一つの家族は、四十年代の両親・二十代の息子・十代の娘・五歳位の男の子の五人家族。両親はテントの近くでおしゃべりをしていましたが、三人の子供たちは実際に仲良く水遊びをしていました。それが一家族

○資料の実感的な読みとりを
社会科指導員
長坂 則彦



みではなく、あちらの家族、こちらの家族と家族単位で遊んだり輪をつくって話しあつたりして、今の日本では見られない温かさをその中に見出しました。人の持つ家族というものは、このようなものであろうと思いました。もう五十年も前になりますが、私たちが育った頃、兄や姉が、妹や弟の面倒をみながら一緒に過ごしたあの懐しさが思い出されました。冬の寒い時は、小さな火鉢に手をかざすみんなの手が触れ合い、餅を焼いたりしながら、ふれあいの場を持つていました。

また、バカンスは、親が子に伝えていくたい考え方・生き方を、朝から晩まで真剣に話し合う機会だとも思います。フランス人は誇り高い民族と言われていますが、このような現代にあっても、かたくなじ古いものを大切に守り伝えていく機会がこういうところにあるのでしょうか。

親と子の話し合う時間が、バカンスの中の授業の一部である。水屋の写真を使っての話し合いはよく見かけるが、この授業では、水屋の内部の絵図をも提示したのがよかったです。発言が活発であった。

本時では、「水屋の絵からどんなことがわかりますか。何を入れてありますか。」と問い合わせていたが、これを、「立田村つくたのかな」と投げかけたらどうだろ。子どもらの発言は、もつときめ細かく、また個性的な反応が期待できたはずである。大切なことは、事象を表面的

ふるさとシリーズ

—この人に聞く—



菅江真澄研究

伊奈 繁氏 氏

天明三年（一七八三年）の春、一人の若い学徒が故郷三河をあとに旅立つた。

なぜ彼が故郷を捨ててしまつたのか、それはいまもわかつてない。彼の名は白井英二秀雄と呼んだが、菅江真澄（すがえますみ）の呼び名で広く世に知られている人である。

印刷屋を本業とする伊奈さんが、国学者菅江真澄と出会ったのは十七、八年前のことである。以来、伊奈さんは菅江真澄に深い関心をもち、傾倒していった。「僕はね、昔は歴史に縁がなかつたんですわ。真澄について調べるようになつたのは、浅井勉先生（現・刈谷工業高校）

がそうということでもない。氣分がよければ仕事はただでもする。その代わり、仕事にかけては名人芸で、初校でも赤字を入れるところがないほどで、誰もが感心してしまうという。

「菅江真澄はなぞの人物なんですね。その故郷も、出自も、若い頃の経歴も、出郷の動機も謎でいっぱいなんです。最近なんとか真澄という人物像がつかめるようになつてきたんですね。もちろん、それも僕自身で思いこんでいる範囲になりますがね。」

話が菅江真澄のことにおよぶと、熱をおびて時のたつのを忘れさせる。

伊奈さんは、地方研究誌などに真澄について数多く報告している。さらに、自分たちの力で岡崎の人に真澄について知つてもらおうと、「菅江真澄のふるさと」と題して一度にわたって仲間の人たちと自費出版している。もちろん伊奈さん自らによるタイプ打ちである。

子どもは教師の鏡である。

教師の力量や言動は、直接児童・生徒に反映し、写し出されるものであり、人間形成の上に大きな影響を与える。

今、教育現場は非行・いじめの問題をはじめ、極めてきびしい状況が後を絶たない。また、一方、地域社会では、教育の在り方を求めるさまざまな論議が、澎湃として起きているが、所詮、教育は教師論につきる。

今日、強く求められている教師像は、教育愛に溢れ、使命感に燃える教師であり、一人ひとりの児童・生徒にくい込み、人間的魅力を吐露し、常に自己研鑽に努める教師である。

岡崎の教師は、ここに思いをいたし、「ひとりを粗末にする時、教育はその光を失う」との至言を体し、全校一致の指導体制のもと、固い敬愛の情で結ばれた師弟関係を一層深め、父母は勿論、地域社会の期待に応えなければならない。

指導の重点

一、よくわかる授業の展開に努め、基礎的・基本的な知識・技能を身につける。

一、礼節を重んじ、規律正しい思いやりのある児童・生徒を育てる。

一、いのちを大切にし、強靭な体力とたくましく生き抜く精神力を育てる。

教育という営みは、教師と子どもとの信頼関係の上に成り立つ。そのためには教

師は、単なる指示者であつたり、命令者であつてはならない。子どもたちに、学ぶ時と場所を適切に与え、子どもたちと共に、あるいは子どもたち自らが学ぶ機会をつくることが必要である。

教師自らも子どもと共に学ぶという心構えで教育を進めることこそ、教師に対する子どもの信頼感、ひいては親の信頼をも克ち得ることになるのである。



(一) 基礎・基本を大切にし、よくわかる授業をするために

小・中学校の学習内容は、家屋に譬えれば、土台であり、柱である。したがって、教師は学級のどの子にも学習に対する意欲を湧き立たせ、学習の基礎・基本となる知識・技能を確かに習得させることが大切である。

学習の基礎・基本の知識・技能は、ただひとときの学習で習得できるものではない。教師の適切な指導と、繰り返し学習を重ねることによって習熟し、確かな能力となるのである。

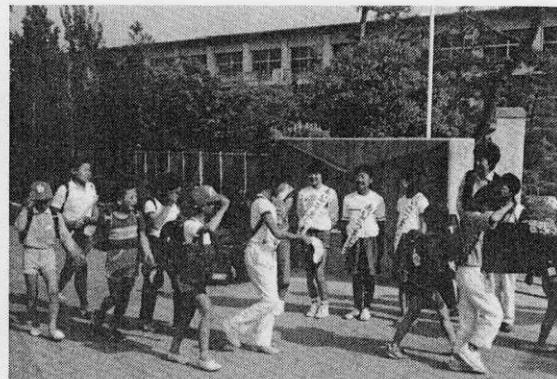
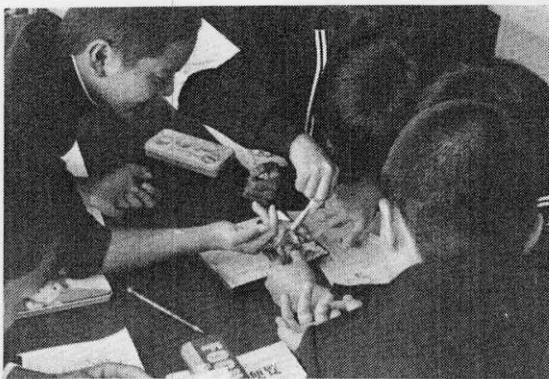
「よくわかる」ということは、子どもにとってみれば学校生活での大きな喜び

の一つであり、自ら主体的・積極的に学習に取り組むための意欲の源泉でもある。教師は常にこのことを念頭において指導したい。

昭和61年度

学校教育の視点





教師にとって教材研究は必須の課題である。教材内容の分析・追究はもちろんのこと、子どもの分かり方を踏まえた指導法にも視点をあてて研究しなければならない。そして、既習事項や発展事項との関連を考えて目標を設定したい。

子どもが真に「よくわかる」ために、子ども自身が実践し、体得する、時と場を学習に位置づけたい。座学よりも行動する学習を工夫し、自ら学習を進める力を養いたい。

また、子どもが一時間中、緊張しつぶなしでは学習効果は望めない。時には間を入れて子どもの緊張を解きほぐす教師自身のゆとりが欲しい。そこに子どもの心をとらえる機会も生じてくる。さらにいつも型にはまつた指導を避け、学習形態の工夫や指導法の多様化などによって子どもが新鮮な気持ちで、生き生きと学習するよう努力したい。

(二) 札節を重んじ、規律正しい思いやりのある児童生徒を育てるために

教師と子どもは友だち仲間では決してない。戦後、子どもの自主性、主体性を重んじる余りに、教師が必要以上に子どもを甘やかし、威厳と信頼を失ったことは否めない。親子関係についても同様である。

人生には長幼、序のあること、尊敬すべきには礼を失してはならないこと、親の恩、師弟の関係等については、子どもたちに教え、導くことが大切である。

教師にとって教材研究は必須の課題である。教材内容の分析・追究はもちろんのこと、子どもの分かり方を踏まえた指導法にも視点をあてて研究しなければならない。そして、既習事項や発展事項との関連を考えて目標を設定したい。

子どもが真に「よくわかる」ために、子ども自身が実践し、体得する、時と場を学習に位置づけたい。座学よりも行動する学習を工夫し、自ら学習を進める力を養いたい。

また、子どもが一時間中、緊張しつぶなしでは学習効果は望めない。時には間を入れて子どもの緊張を解きほぐす教師自身のゆとりが欲しい。そこに子どもの心をとらえる機会も生じてくる。さらにいつも型にはまつた指導を避け、学習形態の工夫や指導法の多様化などによって子どもが新鮮な気持ちで、生き生きと学習するよう努力したい。

(二) 札節を重んじ、規律正しい思いやりのある児童生徒を育てるために

教師と子どもは友だち仲間では決してない。戦後、子どもの自主性、主体性を重んじる余りに、教師が必要以上に子どもを甘やかし、威厳と信頼を失ったことは否めない。親子関係についても同様である。

人生には長幼、序のあること、尊敬すべきには礼を失してはならないこと、親の恩、師弟の関係等については、子どもたちに教え、導くことが大切である。

勿論、私たち教師は、子どもたちが心から慕い、敬ってくれるような人格と能力を身につける努力を怠ってはならない。

学校生活では、特にあいさつと返事をさつの中に、教師と子どもの間に敬慕と慈愛の心とが培われるよう心がけたい。子どもたちが明るく、活気に満ち、しかも整然とした快適な学校生活をおくるために、集団としての規律が必要となる。また、その基礎となる自律の大切さも、集団活動を通して体得させたい。

現在、子どもの世界から仲間遊びの機会が失われているという。核家族で子どもが一・二名という家庭内はいうまでもなく、地域にも友だちへの心配りや思いやりを育てる場が少ない。他を思いやる広い心、豊かな心を育てる場は、いきおい自然を対象とした勤労体験学習や動植物の飼育栽培、野外活動等を通して、子どもたちに奉仕の心、思いやりの心を育てたい。そして、子どもたちから陰湿ないじめの問題を追放したい。

(三) いのちを大切にし、強靭な体力とたくましく生き抜く精神力を育てるために

教師と子どもは友だち仲間では決してない。戦後、子どもの自主性、主体性を重んじる余りに、教師が必要以上に子どもを甘やかし、威厳と信頼を失ったことは否めない。親子関係についても同様である。

人生には長幼、序のあること、尊敬すべきには礼を失してはならないこと、親の恩、師弟の関係等については、子どもたちに教え、導くことが大切である。

文化の進展に伴って、私たちの生活は豊かさの一途を辿っている。日本人すべてが中流という意識のもとで、衣食住とともに満足足りたものとの感が深い。生きるためにひもじさの鬱いもなければ、困難にぶつかって、自ら切り拓いていく

障害もほとんど見当らない。何とはなしに生きて行ける世の中になり、生きているという実感が稀薄になってしまっている。このような現実を踏まえて、私たちは子どもたちに生命の崇高さと生きることの尊嚴を教えねばならない。そのためには、子どもたちを自然に十分に親しませ自然の中で考え、行動する機会を与えたい。その中で子どもたちは、競い合い、助け合いながらたくましく生きる動植物の姿に、共感を覚えるにちがいない。健全な精神は健康な身体にやどる。私たちは常に子どもたちの健康安全に留意すべきである。毎朝の学校での健康観察、保健衛生指導、栄養指導、体育の時間の安全指導等には特に注意したい。

(三) いのちを大切にし、強靭な体力とたくましく生き抜く精神力を育てるために

教师とは人を育てることである。教師自身が視野を広くし、将来を深く考え、豊かな心をもって、子どもの人間教育に全力を尽くしたい。



一所懸命書くから、みんなもがんばれ。」

我ながら、変な理屈だなと思ひながらも、チヨークを走らせた。

初め、いやがつていた子どもたちも慣れるにつれて、興味を持つたらしい。

「先生、にほんごっておもしろいね。」

「ねえ、きのう書いたところ、そらで言えるよ。」等々。

「先生、にほんごは、迷路遊び」とともに人気のある本で、放課のたびに、あちこちの机の上でひろげられている。そんな中にこんな一節がある。

（ことばとからだ）
こうていにて、あおぞらをみあげながら
「そら」ついてごらん。
かぜになつたつもりで、はしりながら「かぜ」つてごらん。
どんなきもち、ことばはからだのなかからわいの。疲れちやうじyan。」

黒板に本文を書き、子どもに写させる。書く練習を兼ねてで、ある。

「先生、こんなにいっぱい書くの。疲れちやうじyan。」

どよめきとためいきの中の子どもたち。今までの国語の授業で書くことを怠っていたつけで、ある。

「先生だつて、えらいんだぞ。みんなは座つてじやないか。先生は立つてゐるんだぞ。先生も



「にほんご」の授業で

南中 鈴木 彰

三月に入り、教科書をやり終えた後、かねてやりたいと思つていた「にほんご」（福音館書店）を手がけた。

黒板に本文を書き、子どもに写させる。書く練習を兼ねてで、ある。

「先生、こんなにいっぱい書くの。疲れちやうじyan。」

どよめきとためいきの中の子どもたち。今までの国語の授業で書くことを怠っていたつけで、ある。

「先生だつて、えらいんだぞ。みんなは座つてじやないか。先生は立つてゐるんだぞ。先生も

ごらん。」

から家庭教師を始めた。

決められていた。

登り棒の上から「そら」、ジヤングルジムから「かぜ」、緑地帯から「き」……。子どもたちの声が響きわたる。

まさに、「からだのなかからわいてくる」ようであつた。

一年生の子どもたちの体の中には、さまざまな思いがあふれている。その思いを少しでも引き出せるようになりたい。

（前任校城南小一年の実践より）

学級文庫に置いてある三冊の「にほんご」は、「迷路遊び」とともに人気のある本で、放課のたびに、あちこちの机の上でひろげられている。そんな中にこんな一節がある。

（ことばとからだ）

こうていにて、あおぞらをみあげながら

「そら」ついてごらん。

かぜになつたつもりで、はしりながら「かぜ」つてごらん。

どんなきもち、ことばはからだのなかからわいの。疲れちやうじyan。」

黒板に本文を書き、子どもに写させる。書く練習を兼ねてで、ある。

「先生、こんなにいっぱい書くの。疲れちやうじyan。」

どよめきとためいきの中の子どもたち。今までの国語の授業で書くことを怠っていたつけで、ある。

「先生だつて、えらいんだぞ。みんなは座つてじやないか。先生は立つてゐるんだぞ。先生も

二月二十日。学校の卒業式後クラス全員で健ちゃんの家へ。

「今から鈴木健一君の卒業証書授与式を行います。」

と、司会者の声。ひげとめがねで装ったP.T.A.会長さんも出てきて大笑いである。

お母さんは「健一の卒業式をやつてもらえたなんて……。」と目を赤くしておられた。

みんなでかわるがわる励ましの言葉を言い、最後に大好きな「若者たち」を歌つた。

君のゆく道は希望へと続く空にまた陽がのぼる時若者はまた歩き始める

健ちゃんの家いつぱいに歌声がひびきわたつた。

健ちゃんの家の前で卒業式

写し終わった子どもの一人が

期待していたのだが、それもできなくなつてしまつた。

卒業式だけは、出席できると

思つてしまひます。」

と、何度も言つてみえた。

「この頃いじめとか、暴力とか騒いでいるけれど、六の二の子を見ていると、全くそんな事と無縁ですね。子どもらしくて素直で、本当に六年の子かしらと思つてしまひます。」

健一君はネフローゼ症候群で二学期は院内学級。三学期になつて元気に登校し始めたが、一月もたたないうちに再発してしまつた。

それで健一君の家の前で卒業式をしようということになつた。

次の日教室に行くと、もうプログラムができ上がり、係分担も



もう一つの卒業式

本宿小 鈴村富士子

健一君はネフローゼ症候群で二学期は院内学級。三学期になつて元気に登校し始めたが、一月もたたないうちに再発してしまつた。

二月になり、健ちゃんの勉強を教えるため、私が夜八時ころ

まつた。

「いいねえ。書けた子から、ノートを持って外に出て、言つて

カ ッ ト

六ツ美中

平 松 等

昭和十年、岡崎師範学校の校長となられた後藤三郎先生は、心と体を鍛えるための修練道場の必要を感じ、今の井田小の位置に「敬愛堂」の建設を思い立った。

資金は、ご自身の著書「細井平洲」の印税をこれにあてたり業界に寄付をねがつて集めましたと、これは先生のご子息の話。

昭和十四年三月、敬愛堂完成の頃は、合宿しながら、米を作り、麦を育て、自給自足的な運営をめざしたという。井田小建設にともない、昭和

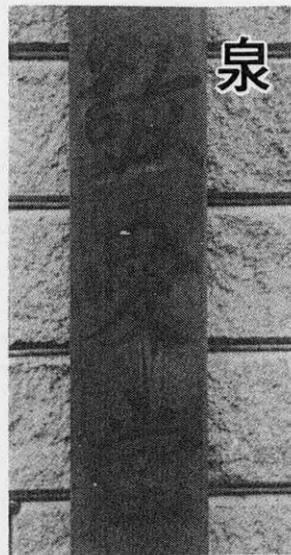
昭和十年、岡崎師範学校の校長となられた後藤三郎先生は、心と体を鍛えるための修練道場の必要を感じ、今の井田小の位置に「敬愛堂」の建設を思い立った。

二十二年には附属小の南西の一角に移築され、敬愛堂の建物だけは残ったが、農場等はなくなってしまった。

昭和三十二年、敬愛堂は老朽化のためとりこわされたが、額だけは、当時の附属小校長であつた伊藤四三九氏（現岡崎子ども美術博物館長）が、後藤先生のご子息である後藤一而氏（東京在住）に贈られ、現在も後藤氏宅の床の間をかざつっている。

敬愛堂を通してねがつた後藤三郎先生の教育理念は、今も、脈々と岡崎の教育の源流として受け継がれている。

敬愛堂門札



東京都練馬区春日町
後藤氏宅

男と女の雇用の機会均等化が叫ばれるようになつて久しいが、ついに法令化され、施行されることとなつた。教員の世界は、これに先がけているが、女性の職場進出の門が、いつそう広くなつたわけだ、喜ばしい限りである。しかし

女性の側から言えば、それ相応の厳しさを感じてほしい。

紙面の刷新ということは、なかなかむずかしいものである。

たとえば表紙。コメントの詩は教師の姿、心情を表現した作品。写真はその学校の子どもの姿を表現したものと性格を改めた。コメント作品は、写真の解説ではなくなつた。教師の詩心の発現を願つてゐる。御協力をお願いします。

シ
木

ス
ア

星は、人類がいだいてきた数多くの謎をときあかしてくれる大宇宙の大好きな来客とみなされ、幾つかの人工衛星がその軌道の近くまでお出迎え。二十一世紀は、これを不吉ではなく大吉の予言とみるか。



*吉原艶史	北村長吉
新人物往来社	¥2800
*知価革命	堺屋太一
PHP研究所	¥1200
*ことばと教育	外山滋比古編
講談社	¥1600
*遊びなのか学問か	丸谷才一
新潮社	¥1000

*「叱り効果」と「おだて効果」 堀内 守
講談社

人はだれでも、叱られたり、ほめられたりして大きくなる。

叱りとおだては、現在の社会問題となっている。さらに、世の中の動きを見れば、叱りもおだても、しだいにプログラミ化されて行く傾向が見える。叱りやおだてが、基本的な構造を変えはじめる。人間実存の変化の兆しも見えてきた。

本書は、こういう事態に目を向け、シンボジウムの形で、身近な問題をとりあげ、その本質を明らかにしていく。